

受講番号 19083 学校名 伊野中学校 氏名 野里 亜由美

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年2組 生徒数 33 名
 科目名 1年生 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW CROWN 1

クラスの様子・特徴

元気に音読や発表ができ、意欲的に活動ができている生徒がいる反面、なかなか作業が進まない生徒がいる。活動についていけない生徒の中には作業に移るのが遅い生徒と、slow learnerが混在している。

問題の確定

対象クラスでは、授業中の集中力や指示に従ってすぐに次の活動に移ることに課題がある。

予備調査

A 授業の観察

ひとつの活動につき、1～2分余分にかかってしまうことは、1回の授業で計6分程度の差が生じ、その分その授業の最後の活動に支障がでていることがわかった。また、私語が多いクラスでは、指示が通らず、全体としての理解度が浅いこともわかった。

B 生徒による授業評価

授業評価に回答した生徒の大半が、おおむね『活動が楽しく、英語の授業は面白い』『音読では声を出している』『活動には積極的に参加している』と答えたのに対し、学習意欲や授業態度に課題のある生徒には無回答が目立った。

C 学力データ

入学時学力検査ではクラス平均と全国平均がほぼ同じであったが、言語運用力の面で、既に学力の二極化の兆候が見られた。また、英語一学期中間テストでもすでに学力差が生じていた。

リサーチ・クエスト

どうすれば、会話・発話しやすい環境を保ちながら、授業に集中し、仲間意識を持って一丸となって授業の活動に取り組めるようになるか。

仮説・実践・検証

仮説1

私語をしたり、授業を茶化したりする生徒は、英語の授業における達成感が得られていないのではないのか。肯定的な評価をその場で与えることで、達成感が得られ、学習意欲につながるのではないのか。

実践1

1) ほめる
 2) 『弾丸インプット』『ビンゴ』『ディクテーション』『日常会話』など、毎回のように取り入れている活動の中で、達成数や到達速度を毎回確認してほめたり、スマイリーをゲットすることで達成感が得られるように工夫する。
 3) スタンプがゲットできる、ゴールにたどりつくなどの、手軽に達成感が味わえるゲーム活動やタスク活動を増やす。

検証1

1) 全体や班でほめると音読活動等で雰囲気はよくなるが、作業に意欲的でない生徒に対しては極力個人的にほめるようにした。
 2) スマイリーシートを埋めると景品があることがわかってから、非常に意欲的に活動し、指示を注意深く聞くようになった。
 3) 「全部終われば席に戻る」という活動でも、スタンプが貰えたりゴールに到達する設定の方が意欲的に活動した。タスク活動はルール違反が出て成立しなかった。

仮説2

授業に参加できないのは、英語に苦手意識を持ってしまっているか、またはすでに授業が理解できなくて参加できなくなっているのではないのか。基本的な読み・書きを補助する手立てを講じれば、授業に参加できるようになるだろう。

実践2

1) 教科書の本文にカタカナでルビをふったもののコピーを渡して、音読活動への参加を促す。
 2) 『弾丸インプット』で言える単語の数が増えたら必ずほめる。
 3) 『書くこと』の指導のときに個別指導できる時間をとる。
 4) 『Today's Menu』と称して、今日の授業で何をするのか明示しておけば準備ができて、意欲が出てくるのではないのか。(次時の予告もしておく)

検証2

1) Lesson4まで実施したが欲しがる生徒が増加したため中止した。
 2) スマイリーをゲットできる数をランクごとに分けることにより意欲喚起できた。
 3) 挙手発言に消極的な生徒に対してもきめ細かく指導できるメリットがあるが、進んで取り組みにくい生徒に対しては効果がなく、TTの授業でないと成立しない。
 4) 序々に定着し、メニューを見て次の作業の準備・心構えができるようになってきている。

仮説3

私語やルール違反をする生徒に対しては、ある程度厳しく接すれば、学習規律が守れるようになるのではないのか。

実践3

1) 私語・授業妨害については厳しく注意し、それでも繰り返す場合は、注意3回で減点1点をルールとする。
 2) 授業態度の改善が求められる生徒は、授業が終わってから個別に注意する。
 3) 英語の授業だけでなく、他教科とも連携して、学習規律を守るように図る。
 4) fast learnerに別の課題を与え、暇が生まれない工夫をする。

検証3

1) 2) 3) については、この仮説の設定後に他クラスでも私語や授業妨害等が目立ってきたため、学年全体として取り組み他教科とも連携した結果、二学期後半落ち着いた。学習規律に関しては英語科だけの問題ではないということ、学級経営と大きく関係することも改めて実感した。1)については-10点になった時点で保護者に協力をあおぎ(2名)、2)については計5名個別指導した。4)では作業内容によって反応が異なった。

研究の成果

アンケートの結果より、2学期末現在、約3割の生徒がいまだに「教科書やワークを開くのをさっとできていない」とこととなるが、「ペア机にするのをさっとできていない」生徒は0%、ときどきできていない生徒が7%と減少し、ペア活動については9割以上の生徒がすぐに作業に移れるようになってきたことがわかる。個人レベルだけの意識よりも、集団としての意識の方が授業活動に影響力があることが判明したので、全体としての意識を高めていく方向で今後も続けていきたい。また、授業の流れを「Today's Menu」として黒板隅に明示する方法が、次の作業ができるためにかなり効果的であった。さらに、授業の中でリスニング活動を取り入れる時間や順番を工夫することで、私語をやめて静まりかえる時間を効果的に設けることができた。

今後の授業改善の課題

最終アンケートの結果、「ついついおしゃべりをしてしまう」生徒が「ときどき」も含めると7割以上いることから、やはり、英語の授業では発話しやすい雰囲気を教員がこころがけている分、私語もしやすい環境になってしまっていることが改善できていない。授業者の観察でも活動に関係ない日本語による私語が見られることが否めない。授業活動に関係ある会話(日英問わず)を意欲的に行う生徒を増やす研究を今後も研究していきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話 伊野中学校 088-892